石灰と稲作のまち稲生を行く

南国市の南南部に位置し、祝貴之の土佐日記にも登場する、古代から新田開発地として開けていた稲生地区。

今回の南国市稲生地区では、この稲生地区を歩いてみました。

稲生公立の田園風景

かっぱ伝説の残る河泊神社

稲生の下田川に架かる稲生橋から南へ約百五十㍍、楢木に覆われた山のふもとに小さなほこらがある。これがかっぱの霊を祭る「河泊神社」。明治初期までここには延福寺という寺があり、もともとその寺の境内にあったとのこと。

「河泊神社」のかっぱ伝説とは、その昔、下田川で泥を洗い流してもらっていた馬の足にかっぱがしがみつき、川中に引き入れようとして反対におかに蹴り上げられたことから始まる。おかで皆からいじめられているかっぱを延福寺の和尚さんが助け、寺に連れて帰り反省させた後、川に返してやると、喜んだかっぱは、毎晩寺のかごにたくさんの川魚を入れてくれるようになった。ある日のこと、かごの代わりに鹿の角を竿を吊り下げるカギにと軒下に下げておくと、その晩からぱったりかっぱは来なくなったとか。

以来、地元の子供たちは川で泳ぐときには、小さく切った鹿の角を腰に下げて泳いだということだ。

今では、面影さえも残っていない寺の境内に、この河泊神社がいつ建てられたのかは悉元の人でも定かではないが、境内で遊ぶ子どもたちもこの伝説はちゃんと知っており、次の世代にもしっかり語り継がれているのが実感できた。

この地区では、毎年旧暦の六月十二日に「かっぱ祭り」が行われている。この日の沿道には提灯や絵馬が飾られ、夜店も並ぶ。境内の土俵では大人、子どもによる相撲大会も開かれ、祭られているかっぱもさぞかし楽しんでいるのではないだろうか。この日のお供えはもちろん"キュウリ"だそうだ。

かっぱ伝説は子供たちにも伝えられている

二期作の父吉川類次

吉川類次は、二期作の早稲米「衣笠早稲」の産みの親である。江戸時代の終わり（一八五八年）稲生村衣笠（現南国市稲生）に生まれた。二十九歳の時父や兄とともに、コレラに感染し、一命をとりとめたのは類次だけで、この時家財いっさい無一物となった。その後寝る間もおしんで働き、三町も四町も田を作る程になる。三十八歳の時、鎌島菊太郎から早生種の種子をゆずり受け、たいへんな努力と研究心で、五年後の七月二十二日、新米二俵を高知市場に出荷した。明治三十二年のことであり、そのころの人々はさぞや驚き、うらやましく思ったのではないかと想像できる。後に米作りで、緑白綬有功章や銀杯など数々の賞を受賞している。類次の功績をたたえる顕徳碑は、現在南国市農協会館庭にある。

類次は篤農家として特に有名であるが、農業だけでなく石灰業や山商売など今でいう多角経営の事業家であったことは、あまり知られていないのではないだろうか。負けず嫌いの反面、人情深い人で、石灰工場で働く人々にも、ずいぶん慕われていたようだ。また、物売りで困っている人には、その品物が不必要でも買ってやったので、売れずに困った時は吉川へ行けというエピソードも残っている。

石灰が尽くなるまで住んでいます
現在も子孫の方々が暮らしています

昭和二年、類次七十歳の時、石灰工場に火災がおきる。台風で大雨の後八月十日夜、生石灰が水分を吸収し、自然発火したと思われる火事現場にかけつける途中、水たまりに落ちていた高圧線に触れ感電死しその生涯を閉じた。

墓は衣笠早稲を育てた田園が一望できる小高い丘にたてられた。その後、二期作の最盛期の田園風景、そして現在の米作りを類次翁にどんな気持ちで眺めていることだろう。二期作の恩人吉川類次という人は、多才なマルチ人間だった。まさに南国再発見できた取材だった。

参考文献
橋詰延寿著「吉川類次翁」

稲生を豊かにした石灰

稲生地区下田は、けずり取られた山肌に、石灰岩の地層が起立していて、すさまじい光景を呈している。ここで石灰の生産が始まったのは、一七二九年（享保十四年）で、美濃国の製法を取り入れ、藩の許可を受けて、当時、馬骨石と呼ばれていた石灰石を窯で焼いたのが最初である。（それまでは、土佐では、貝殻を焼いて石灰を作っていた）その後、一八〇〇年ごろ、阿波の徳右衛門が新しい焼成窯を伝授した事によって、その生産は、急増し、建築用だけでなく、水田の肥料にも用いられるようになり、二期作の発展にも寄与することとなった。昭和四十年代がピークで、石灰工場も十数社で、約二千人の従業員が月産一万㌧以上を生産していたようである。下田の石灰石は品質が良く、製品は土佐灰として阪神方面でも高く評価されていたが、現在では鉱脈が地下深くにもぐり込んでいて、採鉱に経費がかかり採算がとれないので、白木谷や奈路などから石灰石を購入して焼成している。土木工事や宅地の造成に原石をたくさん使ってしまったのが悔やまれるとのことである。

稲生の石灰山
その広大さに改めて感動させられます

現在の主な販路は、阪神方面の鉄鋼工場へ生石灰を出荷している他、消石灰は、建築関係（しっくい壁など）や肥料としても出荷されている。また、一部は、軽質炭酸カルシウム（消石灰を加工して、樹で乾燥したもの）としてゴム工場にも売られている。石灰の県外出荷は、運賃が高くつくし、販路拡大の望みは今のところ薄いとも言われる。

吉原工場の様子

昔は、下田地区一帯、白い煙がたなびき、樹木や屋根は、雪の積もったようで、石灰まみれで動く人の姿も見られ、一種の情緒も感じられたが、公害問題で、集じん装置が取り付けられて昔の面影はない。古い窯跡の横にコンピューター制御の近代的な焼成塔がそびえ立ち、石灰生産の変遷を目の当たりにすることができる。今、稲生地区はさらなる発展を模索中とか。石灰産業の上に、一日も早く陽光のさす日の近い事を祈る。多忙な時間をさいて取材にご協力くださった、土佐石灰の吉川社長さん（二期作の父、類次翁の孫娘婿）はじめ、従業員の皆様に感謝しながら石灰の町下田を後にした。

あなたの職場におじゃまします。

吉本鉄工所

プロ野球ダイエーホークスの本拠地である福岡ドームの建設に携わった会社が南国市にある、という情報をもとに立田にある吉本鉄工所を訪ねました。吉本鉄工所では、鉄工一般のほか、食機粉砕、木門設置、諸機械製作修理などの業務を行っています。福岡ドーム建設のときには、骨組みとなる鉄骨の一部を加工製作しています。社長の吉本宏さんに話を聞きました。

吉本鉄工所の前身は、宏さんの祖父梅枝楼氏が明治時代に創業した吉本農具店で、脱穀機などの農機具を作っていました。梅枝楼氏は若いころ、アメリカに三年間研修に出かけ、技術を学んでいます。後の協和農機（現セイレイ工業高知工場）を興した楠瀬慶吉氏も吉本農具店で働いていました。昭和初期に発明したパットライス製造機が大ヒットし、中国でも売れたといいます。

現在、三代目の宏さんが鉄工所として経営を行っていますが、東京の高輪プリンスホテルを始め有名企業の仕事も入り、現在は三菱電気の製品加工にも携わっているとのことです。従業員は五人と少ないのですが、しっかりした技術を持っている会社という印象を受けました。

◀▲創業者、初代の梅枝楼氏が制作した農機具

▶真剣なまなざしで作業を続ける三代目の宏さんと従業員の皆さん